

多文化都市の清潔教育（私のスケッチ・ブック (9)）

著者	森 明子
雑誌名	洗濯の科学：生活環境の文化誌
巻	46
号	2
ページ	28-31
発行年	2001-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005892

多文化都市の清潔教育

国立民族学博物館 助教授

森 明子

■公園風景

ベルリンにティアガルテンという公園がある。ブランデンブルク門に向かいあう広大な緑地で、かつてはプロイセン王の狩場であった。公園のほぼ中央を往事の馬車道がまっすぐ通り、それにかみつくように遊歩道が森や池、芝地や花壇をめぐって曲線を描く。遊歩道では、友人や家族が静かに会話する姿や、ゆっくりとサイクリングを楽しむ人の姿に出会う。自分もいつのまにか散歩する人のリズムになって歩をすすめるうちに、あたりの様子がずいぶんかわっていることに気がつく。あちこちに大小のグループがいて、そのあいだを子供たちが駆け回っている。木の枝にネットをかけてバレーボールやバドミントンをする姿も見えるし、カードに興じる男性や、編み物をする女性の姿もある。肉を焼くにおいもただよってくる。いつのまにかティアガルテンの東北の一角にきていたのだ。

ここはバーベキュー場である。人々は肉や野菜、調理器具や食器、水や燃料のほか、芝生に敷いて坐る毛布や椅子・テーブルのセット、パラソル、遊具も持参し、いったん場所を定めると、夜暗くなるまで半日以上をそのあたりで過ごすのがふつうである。ドイツ人からは「外国人」と呼ばれる人々で、トルコ人がとくに多いと考えられている。



■都市公園の楽しみ方

このような公園の楽しみ方は、ドイツを含めて西ヨーロッパの人々にとっては異質である。ヨーロッパ人は、公園で滞留することはあまりない。散歩するかランニングするか、場合によってはサイクリングやスケート靴をはくこともあるが、いずれにしても公園は、身体を動かし、新鮮な空気を胸に吸い込む場所である。若い世代を中心に、芝生に寝ころんで日光浴を楽しむ人も少なくないが、その場合も自然の新鮮な空気と日光を体内にとりこむことが目的であって、そのいでたちはきわめて身軽である。

公園の木々の間からバーベキューの煙があらがる光景は、静かな散歩道とはおよそ異なる様相を呈している。ティアガルテンで多くの「外国人」がバーベキューを行っているのは、

じつはここがバーベキューを行うことのできる限られた場所だからである。1998年、ベルリン市は、ティアガルテンを含む数か所を除いてバーベキューを禁止した。

禁止の理由には、防災上の配慮、環境への影響などがあげられた。それでも一定の区画で許可したのは、ベルリンに生活している外国人にとって、バーベキューがたいせつなことを認めたからである。

ヨーロッパ東南部から中央アジアにいたる地域では、家族や友人などの親しい人が集まったり、客人をもてなしたりするときに、屋外で肉や野菜を焼いて供することは、基本的な食事のあり方である。ベルリンにはトルコ人を初めとして、この地域出身の多くの家族が生活している。公園でバーベキューすることを認めたのは、彼ら「外国人」の生活文化を尊重し、彼らが彼ら独自のやり方で都市公園を利用することを認めたことを示している。

■「古くからの都市住民」と 「新しい都市住民」

ヨーロッパの都市において「外国人」という語は、観光客のように旅人としてそこにいる人を意味するわけではない。

「外国人」と呼ばれる人の多くは、10年以上その都市に生活して、二世代目、三世代目を育てつつある家族である。彼らはたしかに外国人ではあるが、長い期間その都市に生活する都市住民である。都市における彼らの位置づけを考えるなら、彼らを「新しい都市住民」と翻訳するほうが現状にあっているだろう。これに対してドイツ人は、「古くからの都市住民」と表現できる。どちらも、ひとつの都市でもともに生活する住民である。

外国人を都市住民として捉え直すなら、外国人の担っている外国の文化も、都市の文化を構成する一部であるという考えが導かれて

くる。私がここで考えてみたいのは、このような多文化状況にある都市の文化についてである。

好むと好まざるとにかかわらず、現代世界のあらゆるところで、この状況が起こっていることは、あらためて述べるまでもないだろう。日本でも、東京という世界的な大都市はまぎれもなく多文化状況を呈しているし、地方都市には地方都市の多文化状況がある。ここでは受け入れやすいものは早く取り込まれ、受け入れにくいものは排除される。しかし、受け入れにくいものを感情的に排除するにまかせるのでは、多文化状況に対して消極的、受動的な態度であるといわれてもしかたがない。では、多文化状況に積極的に取り組むとは、どういうことをいうのだろうか。

異なる文化に、都市文化として市民権を与えようとするのは、まさしく積極的な取り組みといえよう。たとえば、次世代を担う子供たちに、彼らの文化を教育することが考えられる。日本にきたペルー人の子供たちが、母語を失わないようにスペイン語を教育するのはその一例である。ただ子供たちは、ペルーでスペイン語を習得するのは違う何かを、ともに習得している。その意味を考えてみたいのである。

以下では、ドイツのノルトライン＝ウェストファーレン州の試みを紹介しよう。ノルト



ライン＝ウェストファーレン州は、旧西ドイツの首都ボンヤ、日本企業が多く進出するデュッセルドルフを擁するドイツ西部の州で、多くのトルコ人が居住している。民族学者シファオアー（W. Schiffauer）氏によると、州政府は1978年にゲバオアー（K. Gebauer）氏を中心に、イスラム教を教育するプロジェクトを発足させた。プロジェクトは初等教育8年間のカリキュラムと教科書を作成し、1988年から実施されている。キリスト教を基盤とするドイツ人社会において、ドイツ人が主導するイスラム教教育のカリキュラムがつけられたということに、注意する必要がある。

■「清潔は信仰に属す」

このカリキュラムは、図像を中心に編成されている。清潔を教育する「清潔は信仰に属す」という章には4点の図像がある。第1は、トルコ人少年がドイツの住宅の浴室で身体を洗っている写真で、トルコ語とドイツ語で「神は神聖な者を愛する」ということばが付されている。第2は、トルコ人の女性がバスタブの隣に置かれた洗濯機の前で洗濯物を取り出している写真で、「衣類も清潔でなければならぬ」と付記されている。バスタブの隣に洗濯機を置くのは、ドイツの住宅の一般的な配置である。第3は、モスクで礼拝する前に身体を洗っている人々をスケッチした絵で、「浄めの儀礼なしに祈りは成就しない」と付されている。第4は、ドイツの公園でバーベキューを楽しんでいるトルコ人グループの写真で、「環境を汚さないようにしましょう」という付記がある。

図像は、いずれもドイツの都市で子供たちが日常的に経験している生活風景である。絵や写真を見た子供たちは自己の経験を述べるから、教師はそこから子供たちの理解がどのようなものかを把握し、それぞれに応じたコ



ーランの一節を引用しつつ宗教教育を行う。たとえば清潔については、コーランの第4篇46(43)節「酔っている時には、自分で自分のいっていることがはっきりわかるようになるまで祈りに近づいてはならぬ。また身が穢れている場合には、すっかり洗い浄めるまで」第74篇4、5節「己が衣はこれを浄めよ。穢れはこれを避けよ」が引用される。

こうして図像を媒介として、ドイツの都市社会の日常的な経験とイスラム教を結ぶ、関連領域が構築される。図像を経由することで、子供たちがイスラム教を抽象的な教義としてではなく、自らのものとして内面化できることが期待されている。ただし、この関連領域で子供たちに教育されるのは、イスラム教の教義だけではない。ドイツの都市社会で前提とされる清潔というモラル、そのモラルにそった行動様式、さらにエコロジーに配慮した行動規範を、子供たちがあわせて学んでいるということを見逃すことはできない。

プロジェクト推進者たちが子供たちに期待しているのは、イスラム教を自らの宗教としてしっかり内面化することによって、一部の人種差別主義者の暴力的な言説に立ち向かい、それを克服できるようになることである。ドイツの一部にくすぶる人種差別主義者が、理由なくムスリム(イスラム教徒)をきたないとし、トルコ人住宅の焼き討ちなどの暴力に及

んでいるからである。

■市民文化を育てる

清潔は、一方では個人の理性を超えた感覚に訴え、他方では社会生活をいとなむモラルになる。それは宗教上の行動規範になり、一方では排除のスローガンとして暴力に結びつくこともある。ドイツの都市に住むトルコ人の子供たちに求められる清潔は、ドイツ的な清潔の押し付けであってはならないが、かといってトルコの農村と同じようにふるまっていたら、ドイツの都市生活を快適に送ることはできない。ドイツの都市において適切とみなされる清潔の行動様式と、コーランの教えとが、対話する必要がある。また、ドイツ社会で重視されている環境の意識と結ぶことも必要である。その中で健康や衛生に関する知識が習得され、実践されるべきである。しかも、それらをあわせてなおトルコ人、イスラム教徒としての文化的、宗教的なアイデンティティを確保することが求められる。

これは、トルコ人のためのイスラム教育ではあるが、子供たちに期待されている文化は、トルコにおけるイスラム文化ではなく、ドイツ文化と対話し、交渉する、ドイツの都市文化としての新しいイスラム文化であり、このプロジェクトは、イスラム教徒としてのアイデンティティをもつ、ドイツ市民を育てるプロジェクトといえよう。

ノルトライン＝ウェストファーレンのプロジェクトから私たちが学ぶのは、市民文化を育てるという考え方である。市民文化は、新住民に対してやみくもに同化を求めるところに存続するのではない。そうではなくて、新住民がもたらした外来の文化と交渉し、互いを生かそうとするところに、新しい市民文化が育てられる可能性があるといえる。

多文化社会における市民生活で問題になる

のは、きわめて日常的な生活文化の違いである。洗濯をどのようにするか、ゴミをどう捨てるか、身体をどう洗い、家まわりの掃除をどうするか、公園をどう使うか、といったような事柄の集積である。そのような場面で、清潔観の違いはしばしば大きな意味をもっている。

清潔の感覚や意識が、宗教にまで連続する広がりをもつものであることを、私たちはまず理解しよう。しかし、だからといって、そのような行動様式、文化や宗教が、固い殻に包まれた変更不可能なものだというわけではない。それは対話が可能で、交渉を繰り返しながら調整していくことができるものである。そうでなければ、現代の多文化的な状況で社会生活を営んでいくことは不可能であるし、交渉し、調整することで、私たちの文化は活力をもった魅力的なものになると思われる。

市民文化とは、もしかしたら、そういう努力のことをいうのではないだろうか。

□参考文献

- 1) Schiffauer, Werner “Der Islam als civil religion; Eine deutsche Geschichte”, in *Fremde in der Stadt*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main; 50-70. 1997.
- 2) 井筒俊彦訳：『コーラン』上、中、下、岩波文庫、岩波書店(1957-1958)

